

特集

薬物と精神療法

第2回日本精神病理・精神療学会シンポジウム

(1965年10月11日 於京都会館)

■ はじめに ■

司会 懸田 克躬

精神療法と薬物療法とは今日の精神医学において、もつとも基本的な療法というべきであろう。精神療法の要素を含むことのない薬物療法、いなく、一般に医療がありえないことは多くの人々によつてすでに指摘されていることであり、いまさらとくに多くの言葉を費やす必要はないことであると思う。

一方に精神療法に薬物を用いることについては、精神療法の本質論や、たとえ、これを用いるとしても、いかなるときに、いかなる方法で行なうかというような意味あいではさまざまな問題が提起されている。しかし、薬物療法が精神療法について与えた課題は単にそのような点に尽きるものではないと思う。

ともあれ、一般に精神医学者のとりあつかっている症例については精神療法と薬物療法とを併用

している場合が多いのがわれわれの現実の姿ではないかと思う。私自身、精神医学者としてはこの両者の併用が臨床的実践の場において可能であるところにこそ、やむことのない課題としての精神療法の理論と技法とその効果についての考察に際してのひとつの有力な手がかりを求めうようにも思うのである。私自身としては、われわれは薬物療法を経験することによつて、精神療法について考える上でのさまざまな反省を与えられていると思つている。それは当然に、薬物療法の効果を云々する上においての問題でもあるが、より多く、精神医学者に対しては精神療法についての、あるいはその治療機転そのものについての、さらには、「神経症の本質ならびにその成因と治療」そのものについての反省を強いられているものがあるのだと思う。

このシンポジウムが、この点についても、ある示唆を与えるものとなることを切に願うのである。果して、それが実現されているか否かはこのシンポジウムの記録そのもののみが答えることであると思つている。(順天堂大学教授)



写真 左は司会は懸田氏



右は左から講演者の新福、西園、宮本、佐藤の諸氏